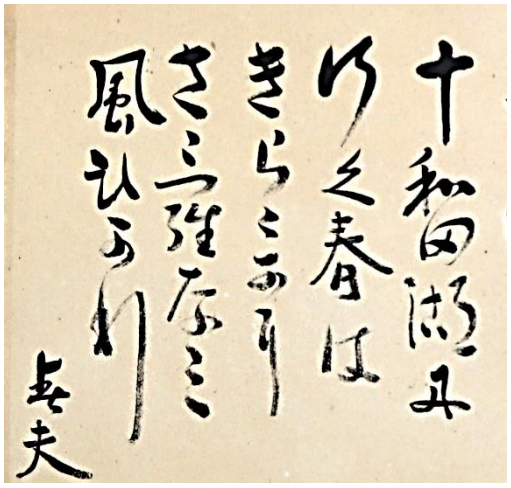
十和田市郷土館企画展

新収蔵資料展

滝沢地区発見の「古銭」



「十和田湖上口吟」（佐藤春夫筆）

「堅蕾破雪之図」（林誓作）

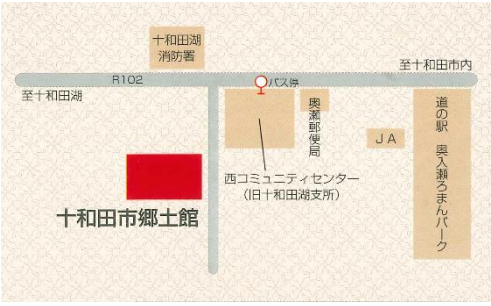
「腰籠」

令和3年

1/9㊏ ▸ 3/21㊐　入場無料

午前9時～午後5時　※月曜日休館

十和田市郷土館



十和田市大字奥瀬字中平61－8

TEL0176-72-2340

東北新幹線「七戸十和田駅」・「八戸駅」から十和田観光電鉄バス乗車「十和田市中央」下車、焼山行き「西コミュニティセンター前」下車、徒歩1分

はじめに

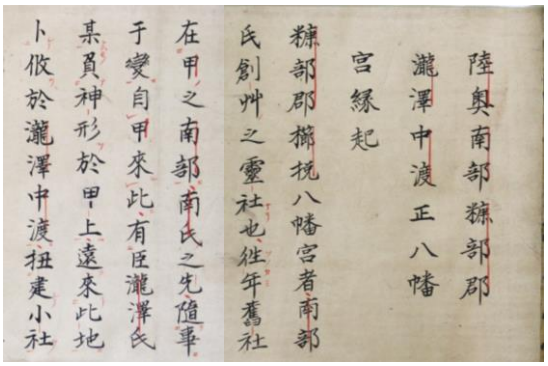
十和田市郷土館は、正しい郷土の理解を深めることを目的に昭和 47 年に開館しました。収蔵品は 1 万点を超えておりますが、その多くは市民の皆様から寄贈をいただいた資料がもととなっています。

近年においても、十和田市の歴史や文化を知る上で重要な資料の寄贈が相次いでおり、その一部についてご紹介いたします。

①　甲斐の国から来た南部氏

「陸奥南部糠部郡瀧澤中渡正八幡宮縁起」は正徳 4 年（1714 年）のもので、市内の四和地区の滝沢家に伝来したものです。滝沢家は江戸時代、三戸の御給人を勤めた家柄で、戦国時代から江戸時代にかけて当地方を支配した南部氏の総鎮守である櫛引八幡宮（八戸市）の創始に深い繋がりをもち、その神事に関わってきたとされます。

この縁起には、南部氏の守護神である八幡宮のご神体を甲州（山梨県）から市内の滝沢中渡の地に運んで八幡宮を建立。その後、これを八戸の櫛引に移して櫛引八幡宮が創建されるという故事が記載されています。南部氏と中渡八幡宮、櫛引八幡宮の関係を示す重要な資料です。


陸奥南部糠部郡
瀧澤中渡正八幡
宮縁起
糠部郡櫛挽八幡宮者南部
氏創州之靈社也往年奮社
在甲之南部南氏之先隨軍
于變自甲來此有臣瀧澤氏
某負神形於甲上遠來此地
卜攸於瀧澤中渡扭建小社

陸奥南部糠部郡瀧澤中渡正八幡宮縁起

櫛引八幡宮（八戸市）

②　江戸時代の村と経済

滝沢地区舘集落の力石家からは、古文書及び古銭の一括資料を寄贈いただきました。

力石家は村の肝入（代表者）も担ったことのある家柄で、資料は旧家の解体の際に発見されたものとされます。

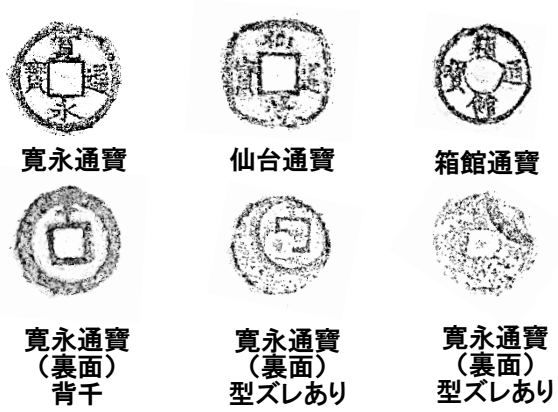
古文書は 7 点で江戸から大正時代の税制、宗教にかかわるものなどとなっています。

古銭は 10,500 枚以上に及ぶもので、いずれも江戸時代のものです。全て一文銭で寛

皆済目録覚帳

村名附

永通寶がほとんどですが、地域限定で流通した仙台通寶、箱館通寶も少数ながら混じっています。粗悪な鉄銭が多く、当地方で多量に流通したとされる密鋳銭が数多く混じっているようです。当地域の貨幣経済を知る上で貴重な資料といえるでしょう。



③　会津藩から来た武士の刀

藤田家より寄贈された刀剣類は「刀」「脇差」「短刀」の３本で、「刀」には「陸奥会津住藤原道辰(みちとき)　慶応三年(1867 年)」の銘があります。

藤田家は会津藩士の流れをくむ小松八次郎の子孫の家系で、戊辰戦争(1868 年～69 年)での会津藩の敗北による斗南藩創設により、当地方に移住してきたようです。

小松八次郎の兄には、戊辰戦争の時に白虎隊に参加し、16 歳で戦死した小松八太郎（1853 年～68 年）がいます。

刀(慶応三年(1867 年))

④　くらしの道具
（旧冷害研究資料館所蔵資料）

相坂地区にあった青森県産業技術センター農林総合研究所藤坂稲作部冷害研究資料館が平成 31 年３月に廃止となりました。藤坂稲作部の前進は昭和 10 年（1935 年）に開設された青森県農事試験地藤坂試験地で、昭和 24 年（1949 年)、同試験地において、技師田中稔が中心となって品種改良した耐冷品種米「藤坂５号」は北国のコメ作りを大きく変えたといわれています。こうした経緯から同資料館では、冷害対策研究の歴史等について紹介をおこなってきました。

郷土館では、冷害研究資料館に所蔵されていた民俗資料の一部について寄贈いただきましたのでご紹介します。

旧冷害研究資料館

ゾウリ

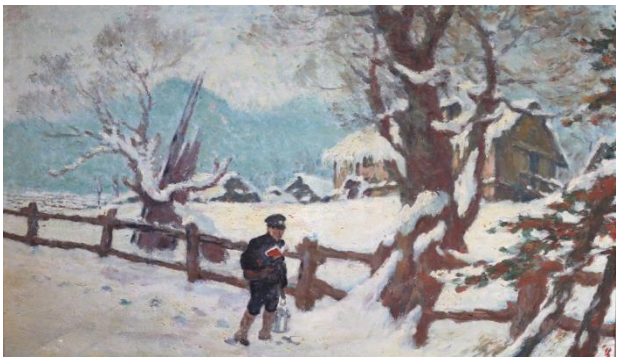
⑤　平和の使　苫米地義三

苫米地義三（1880 年～1959 年）は、十和田市出身の政治家・実業家です。この度、義三氏のご親族である苫米地家よりゆかりの品を寄贈いただきました。

相坂村で生まれた義三は、北海道に移住。生活費や病気に苦しみながら勉学にいそしみました。阿部製紙会社、大阪硫曹株式会社を経て、大日本人造肥料株式会社に勤務。昭和 20 年（1945 年）には社長に就任しています。

昭和 21 年には、衆議院議員に当選、以後、国会議員を 15 年つとめました。この間、運輸大臣、官房長官にも就任しています。

また、昭和 26 年（1951 年）には、日本の独立について話し合うサンフランシスコ講和会議に全権委員の一人として参加しています。

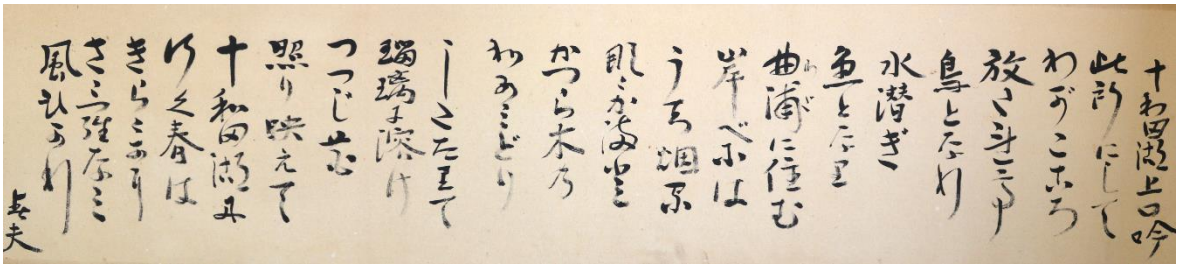


「堅蕾破雪之図」（林誓作）
（苫米地義三の幼い頃を描いたとされる絵）

苫米地義三書 「平和」

⑥　十和田湖を愛した文豪　佐藤春夫

詩人、作家として著名な佐藤春夫（1892 年～1964 年）は、三本木高校の校歌を作詞したことが縁となり十和田湖・奥入瀬渓流を訪れ、その景観にいたく感動したとされます。その後、十和田国立公園指定 15 周年を記念する事業にも参加、旧知の仲であった高村光太郎を功労者顕彰記念碑（乙女の像）の制作者となるよう尽力しました。「十和田湖上口吟」は昭和 27 年頃の作と推定されます。



佐藤春夫「十和田湖上口吟」

「リードオルガン」

昭和初期の日本楽器製造株式会社（現ヤマハ株式会社）製オルガンで小学校の唱歌（音楽）の時間に使われたものです。当時大変高価なもので、児童たちが勝手に触ると先生にしかられたそうです。